

あの夏の蛍

池田 真也

川上 弘樹：川上家の長男。∞年前の事故で死亡。

川上 篤弘(24)：弘樹の弟。実家の酒屋を手伝っている。

川上(落合)有佳子(27)：弘樹の未亡人

川上 春樹：篤弘と弘樹の父

川上 律子：篤弘と弘樹の母

◇ 駅

とある田舎町。さびれた駅。その隣に立っているトイレの中。鏡に写る自分の顔を見る篤弘(あつひろ)。今日はあの人に会える。窓からはホームが見える。ディーゼルカーが到着した。篤弘、腕時計を見やり外にでる。駅から出てくる乗客の中、ひとりだけあか抜けた女、有佳子(あきこ)が見えた。彼女は駅を出たところで、迎えに来ているはずの篤弘を探す。彼は彼女に声をかけずに少し離れた建物にもたれて彼女を見つめる。有佳子は篤弘に気づかず、大きなバックをおいてぼんやりと空をながめている。そんな彼女を篤弘は何も言わずに見ている。やがて有佳子は篤弘の方を見る。彼に気がつく有佳子。(なんていじわるな)といたずらっぽく、またひどく懐かしげに笑みを投げる。篤弘も彼女にほほ笑む。

◇ 篤弘の車の中

篤弘 「有佳さんが来ること、みんな前から楽しみにしてるんだ。」

有佳子 「ごめんね。篤ちゃん。仕事忙しいんでしょ」

篤弘 「いやあ。平気だよ。配達終えてからきたんだ」

有佳子「お父さんも、お母さんもお元気なのかしら」

篤弘 「みんな元気だよ。3年もたつからね。もう忘れかけてるよ。

人間なんて死んじまったら終わりだよな。……有佳さんも元気そうだね。だいぶ明るくなったみたい」

有佳子「うん。忙しさに身をまかせているうちに時間が経ったっていう感じかな（窓から外を見て）懐かしい……変わってないね」

篤弘 「兄貴も有佳さんも、なんでみんな東京なんかに行きたがるのかな」

有佳子「東京っていつでも別にどうってことないんだけどね。ただ人のたくさんいるところにすがっていただけなんじゃないのかしら」

篤弘 「二度、兄貴のところに行ったけれども、人が多すぎるよ。俺は住みたいとは思わねえな。狂ってるよ。」

有佳子「うん……でもあれだけ狂ってるよね、余計なことを考えなくてもいいのよ」

篤弘 「……」

有佳子「……私ね。川上家から籍を抜こうと思うの。そのことを、言うために来たんだ」

篤弘 「……そうか。それがいいよ。いつまでも死んだ人間のこと考

えてくよくよしたって仕方ねえしな。俺もその方がいいと思う…別
に有佳さんが邪魔だつて言ってるわけじゃないぜ」

有佳子「うん。わかってる」

◇川上家

川上家は酒屋を経営している。篤弘は店を手伝っている。

十畳間。

仏壇ではほ笑む川上弘樹の写真。享年27。

彼の未亡人有佳子が訪ねて来たことで、家族は弘樹の思

い出話で盛り上がる。誰もがもう悲しみを忘れている。

東京での生活を楽しそうに話す有佳子を篤弘は見ている。

◇同。

片付けも終わり部屋には父親の春樹と母親の律子が残る。

仏壇に手を合わせる律子と煙草をくゆらせている春樹。

律子 「子供がいてくれたらねえ」

なにも言わない春樹。

◇弘樹の部屋

一階の一番端、弘樹の部屋はそのままに残してある。

篤弘 「有佳さん。はいるよ」

有佳子「どうぞ」

ふすまを明けて入ってくる篤弘。有佳子は弘樹の机に座っている。

有佳子「ごめんなさい。勝手に入ったりして」

篤弘 「そのままにしてあるだろ。誰もいじろうとしないんだ」

有佳子「うん。なんかここだけ時間が止まっているみたい」

篤弘 「ここにはめったに入らないんだけどね。ほこりっぽいでしょ。

何年もそのままにしてあるから」

有佳子「ううん。そんなことない」

篤弘 「今でも兄貴のこと思い出す」

有佳子「・・・どうかな。あの人が死んだときは・・・絶望っていう感じで、一日中あの人の事ばかり考えて、そのたびに倒れそうだった。

本当に倒れそうだったの。でも今では随分楽になって、忙しい時は思い出さない日もあるぐらい、それに思い出しても、そんなに苦しくないんだ。体の中にあつた、なんていうのかな・・・かたまりみたい

なものが、少しずつ小さくなっていくみたいな…それなのにね、それがなくなっていくのが寂しいっていうか、いいのかなっていう…」

篤弘 「好きだったんだね」

有佳子「ほほ笑んで」うん。好きだったよ。こんなに好きだったの
かっていうぐらい好きだった。…篤っちゃんにとって、あの人って
どんなお兄さんだったの？」

篤弘 「兄貴とは年が離れてたからな。けんかしてもかなわなかったしね。兄貴って頭も良かったし、何をやらせてもそこそこ様になって…好きだったよ。優しかったし…でもなんていうのかな、ほら、おれって頭悪いから。兄貴って一族の誇りみたいなかんじだっただろ。親なんか俺には全然期待してなかったみたいだし」

有佳子「そんなことないよ」

篤弘 「そうさ。いつか兄貴を負かしてやるって思ってたんだけど、いつかがくる前に死んじゃまって…きたねえよな」

有佳子「でもね、あの篤っちゃんのこと、うらやましがってたんだよ」

篤弘 「うそだよ」

有佳子「あいつは誰からも好かれるやつだ。ああいう人間はどこに行っても楽しく生きられるんだろうな。……あの人仕事なんかでも敵が多かったのよ。若い内から重要なポスト任されて、それに責任感がすごく強かったでしょ。まじめすぎたのよね」

篤弘 「鉄のような男だって思ってたんだけどな」

有佳子「男の人には弱いところを見せたくなかったのよ。（机の落書きを見て）『弘樹のバカヤロー』だって。これ篤っちゃんが書いたんですよ。」

篤弘、机に体を近づける。有佳子のうなじが目にはいる。

有佳子 「『歌を歌ってだれかを眠らせてやりたい。だれかのそばですわっていたい』……（大きく息を吐いて）ふうん」

篤弘 「これ、きっと有加さんのことだね。」

有佳子「本当に死んじゃったのかな。まだどこかで生きてるような気がする。」

篤弘 「……」

有佳子、窓から外を見る。

沈黙。

有佳子「あつ。」

有佳子立ち上がり、ガラス戸をあけて外に出る。

篤弘 「どうしたの」

有佳子「ねえ、あれホタルじゃない？」

篤弘 「ライトかなんかだろ」

ふたりは外に出る。ホタルのいるほうに歩いて行く

有佳子「ホタルよ。間違いない」

有佳子『ほ、ほ、蛍来い。こっちの水は甘いぞ。』川上家の広い庭。

歌いながら蛍を追って歩いて行く。有佳子の後を追いかける篤弘。

篤弘 「もうこの町にホタルなんていないよ」

有佳子「ぜったいホタルよ。」

篤弘 「目の錯覚さ」

有佳子「ほらいた。あそこ」

篤弘、うしろから有佳子を抱き締める

篤弘 「ホタルじゃない。ホタルはいないんだ」

有佳子「篤っちゃん。やめて」

篤弘 「・・・好きだ。」

有佳子「いや」

篤弘 「好きだった。ずっと好きだった」

有佳子、篤弘の手を振りほどく。目には涙をためている。

有佳子「わたし・・・自分のバランスをとることだけで精一杯なの。これ以上重い物はもてない。・・・お願い。許して」

走って行く有佳子。家の中に入り扉を閉める。立ち尽くす篤弘。

◇篤弘の部屋

ベッドに寝転がり天井を見ている。大きなため息。

◇翌朝。川上家の食卓

春樹は新聞を読み、律子と有佳子は朝食の用意。

パジャマ姿だらしない格好で入ってくる篤弘。昨日のこ
とを思い出し気が重い。

有佳子「おはよう。寝坊だぞ」

明るくほほ笑む有佳子。

篤弘「あ・・・おはよう」

律子「今日は有佳子さんが店番手伝ってくれるんだって」

春樹「できるかい」

有佳子「大丈夫ですよ。わからないことがあったらお母さんに聞きますから」

◇川上酒店

配達を終えて篤弘が帰ってくる。有佳子がひとりで棚を整理している。

有佳子「おかえりなさい」

篤弘「あ…あの」

有佳子「亀崎の木下さんがビールケースまだですかって電話あったわよ」

篤弘「しまった。忘れたよ」

有佳子「別に急いでないって」

仕事を続ける有佳子。

篤弘「…有佳さん、昨日は…」

律子が奥から8mmフィルムを持って出てくる。

律子「ねえ、押し入れ整理してたらこんなものが出て来た」

篤弘「あっ」

有佳子「なんですか」

律子 「篤弘がね、高校時代に撮ってた映画」

有佳子「へえ。話には聞いてたけど」

律子 「これはどんなやつなの」

篤弘 「なんだろう。わかんないなあ」

律子 「見ようよ」

有佳子「見たい見たい。いいでしょ」

篤弘 「ああ。でもつまんないよ」

有佳子「いいわよ。見ましょうよ」

律子 「お前も見ない？」

篤弘 「俺はいいよ」

有佳子「じゃあ、ちょっと店番お願い」

律子と有佳子、奥に入っていく。

◇川上家の茶の間

律子 「映写機の使い方分かる」

有佳子「分かりますよ。ここにこうやってやれば・・・ほら」

映像が映し出される。スクリーンの中から現れたのは9年

前の弘樹。これから起こる不幸な出来事のこととは知らずに

はしゃいでいる。

ふざける弘樹を有佳子はなにも言わず、じっと見つめて
いる。

フィルムが終わる。カタカタなり続ける映写機の音。

部屋が明るくなる。

律子と有佳子のため息。

立ち上がる 律子。

有佳子「…弘樹に会いたい…」

泣いている有佳子。彼女を抱き締める律子。

有佳子「弘樹に会いたい…弘樹に会いたい」

泣きじゃくる有佳子。

部屋の外から一部始終を聞いている篤弘。

◇駅、待ち合い室

有佳子が帰る日。彼女を送りに来た篤弘。待ち合い室のふ
たり。お互いに何も言わない。

◇同、ホーム

軽やかに歩いている有佳子。その後ろから彼女のかばんを
持って歩く篤弘。

有佳子、振り返り篤弘から荷物を受け取る。

有佳子「ありがとう」

篤弘 「・・・有佳さん。ごめん。俺、有佳さんが懸命に守っていたも
のを、壊したのかもしれない」

有佳子「明るく笑う）私ね、むこうに帰ったら、生活を思いっきり忙
しくするんだ。仕事がね、今勝負のときなの。男の世界で通用する
かどうかわからないけど、どこまで自分ができるか試してみようと
思う」

篤弘 「・・・頑張ってね」

有佳子「頑張る。・・・頑張るよ」（ほほ笑む）

篤弘 「・・・」

列車が到着した。

有佳子。篤弘の方を見る。

有佳子「来て良かった・・・元気だして！笑いなさいよ」

有佳子笑顔。篤弘も笑顔になる。

有佳子、列車に乗る。

有佳子「ありがとう。…本当にありがとう」

ドアが閉まり発車する列車。

いつまでも見送る篤弘。

◇川上家の庭。夜。

ひとり縁側に座ってビールを飲んでいる篤弘。家の中では父親が野球中継をみているのだろう。テレビの音が聞こえて来る。

篤弘、うなだれた後、空になった缶をつぶす。顔をあげる。

驚く篤弘。小さな光が目の前を走る。ホタルがいるのか。

一瞬緊張するが（まさか）という思いで息を吐く。

力が抜け、さびしそうに笑う篤弘。

終わり。